

若紫

渋谷栄一訳

第一章 紫上の物語 若紫の君登場、三月晦日から初夏四月までの物語

「第一段 三月晦日、加持祈祷のため、北山に出向く」

瘧病みに罹りなされて、いろいろと呪術や加持などして差し上げさせなさるが、効果がなくて、何度も発作がお起こりになったので、ある人が、「北山に、某寺という所に、すぐれた行者がございます。去年の夏も世間に流石して、人々がまじないあぐねたのを、たちどころに治した例が、多数ございました。こじらせてしまうと厄介でございますから、早くお試しあそばすとよいでしょう」などと申し上げるので、呼びにおやりになったところ、「老い曲がって、室の外にも外出いたしません」と申したので、「しかたない。ごく内密に行こう」とおっしゃって、お供に親しい者四、五人ほど連れて、まだ夜明け前にお出かけになる。

やや山深く入った所なのであった。三月の晦日なので、京の花盛りはみな過ぎてしまっていた。山の桜はまだ盛りで、入って行かれるにつれて、霞のかかった景色も趣深く見えるので、このような山歩きもご経験なく、窮屈なご身分なので、珍しく思われなさるのであった。

寺の有様も実にしんみりと趣深い。峰高く、深い岩屋の中に、聖は入っているのだった。お登りになって、誰ともお知らせなさらず、とてもひどく粗末な身なりをしていらっしやるが、はつきりそれと分かるご風采なので、「ああ、恐れ多いことよ。先日、お召しになった方でいらっしやいますか。今は、現世のことを考えておりませんので、修験の方法も忘れてございます。どうして、このようにわざわざお越しあそばしたのでしょうか」

と、驚き慌てて、にっこりしながら拝する。まことに立派な大徳なのであった。しかるべき薬を作って、お吞ませ申し、加持などして差し上げるうちに、日が高くなった。

「第二段 山の景色や地方の話に気を紛らす」

少し外に出て見渡しなされると、高い所なので、あちこちに、僧坊どもがはつきりと見下ろされる、ちよつどのつづら折の道の下に、同じ小柴垣であるが、きちんとめぐらして、ござつぱりとした建物に、廊などが続いて、木立がとても風情あるのは、

「どのような人が住んでいるのか」

とお尋ねになると、お供である人が、

「これが、某僧都が、二年間籠もっております所だそうでございます」

「気のおける人が住んでいるらしい所だな。何とも、あまりに粗末な身なりであったな。聞きつけたら困るな」などとおっしゃる。

美しそうな童女などが、大勢出て来て、闕伽棚に水をお供えしたり、花を折ったりなどするものも、はつきりと見える。

「あそこに、女がいるぞ」

「僧都は、まさか、そのようには、囲って置かれまいに」

「どのような女だろう」

と口々に言う。下りて覗く者もいる。

「きれいな女の子たちや、若い女房、童女が見える」と言う。

源氏の君は、勤行なさりながら、日盛りになるにつれて、どうだろうかとご心配なさるのを、

「何かとお紛らわしあそばして、お気になさらないのが、よろしうございます」

と申し上げるので、後方の山に立ち出でて、京の方角を御覧になる。遠く霞が立ちこめていて、四方の梢がごことなく霞んで見える具合、

絵にとてもよく似ているな。このような所に住む人は、心に思い残すことはきつとあるまい」とおっしゃると、

「これは、まことに平凡でございます。地方などにございます海、山の景色

などを御覧になられましたら、どんなにか、お絵も素晴らしいご上達あそばしませう。富士の山、何々の嶽」

などと、お話し申し上げる者もいる。また、西国の美しい浦々や、海岸辺りについて話し続ける者もいて、何かとお気を紛らし申し上げる。

「近い所では、播磨国の明石の浦が、やはり格別でございます。どこと違って変わっている所はないが、ただ、海の方を見渡しているところが、不思議と他の海岸とは違って、ゆつたりとした所でございます。」

あの国の前国司で、出家したての人が、娘を大切に育てている家は、まことにたいしたものです。大臣の後裔で、出世もできたはずの人なのですが、たいそうな変わり者で、人づき合いをせず、近衛の中将を捨てて、申し出て頂戴した官職ですが、あの国の人にも少し馬鹿にされて、何の面目があつて、再び都に帰ろうか』と云つて、剃髪してしまつたのでございませうが、少し奥まつた山中生活もしないで、そのような海岸に出ており、間違つているようですが、なるほど、あの国の中に、そのように、人が籠もるにふさわしい所々は方々にありますが、山奥の人里は、人気もなくもの寂しく、若い妻子がきつと心細がるにちがいないので、一方では気晴らしのできる住まいでございます。」

最近、下向いたしました機会に、様子を拝見するために立ち寄つてみましたところ、都でこそ不遇のようでしたが、はなはだ広々と、豪勢に占有して造つている様子は、そうは言つても、国司として造つておいたことなので、余生を豊かに過ごせる準備も、またとなくしているのです。後世の勤行も、まことによく勤めて、かえつて出家して人品が上がつた人でございませう」と申し上げると、

「ところで、その娘は」と、お尋ねになる。

「悪くはありません。器量や、氣立てなども結構です。代々の国司などが、格別懇ろな態度で、結婚の申し込みをするようですが、全然承知しません。『自分の身がこのようにむなしく落ちぶれているのさえ無念なのに、この娘一人だけだが、特別に考えているのだ。もし、わたしに先立たれて、その素志を遂げられず、わたしの願つていた運命と違つたならば、海に入つてしまえ』と、いつも遺言をしているそつでございませう」と

と申し上げると、源氏の君もおもしろい話だとお聞きになる。供人は、

「きつと海龍王の后になる大切な娘なのだろう。氣位の高いことも、困つたものだね」と云つて笑つ。

このように話すのは、播磨守の子で、蔵人から、今年、五位に叙された者なのであつた。

「大変な好色者だから、あの入道の遺言を破つてしまおうという気なのだろう」

「それで、うろつろしていたのだろう」

と云い合つている。

「いやもう、そうは言つても、田舎びてているのでは。幼い時からそのような所に成長して、古めかしい親にばかり教育されていたのでは」

「母親は由緒ある家の出のようだ。美しい若い女房や、童女など、都の高貴な家々から、縁故を頼つて集めて、眩しく育てているそつだ」

「無風流な人が国司になつて赴任して行つたら、そんなふうになんか安心して、置いておけないのでは」

などと言つる者もいる。源氏の君は、

「どのような考えがあつて、海の底まで深く思い込んでいるのだろうか。海底の海松布」も何となく見苦しい」

などとおつしやつて、少なからず関心をお持ちになつてゐる。このような話でも、普通以上に、一風変わったことをお好みになるご性格なので、お耳を傾けられるのだろうか、と拝見する。

「暮れかけてきましたが、お病気がおこりあそばさなくなつたようでございます。早くお帰りあそばされませ」

と言つのを、大徳は、

「おん物の怪などが、憑いている様子でいらつしやいましたが、今夜は、やはり静かに加持などをなさつて、お帰りあそばされませ」と申し上げる。

「それが、およろしうございませう」と、皆も申し上げる。源氏の君も、このような旅寝もご経験ないことなので、何と云つても興味があつて、それでは、早朝に」とおつしやる。

「第三段 源氏、若紫の君を発見す」

人もいなくて、何もすることがないので、夕暮のたいそう霞わたっているのに紛れて、あの小柴垣の付近にお立ち出でになる。供人はお帰しになって、惟光朝臣とお覗きになると、ちょうどこの西面に、仏を安置申して勤行している、それは尼なのであった。簾を少し上げて、花を供えているようである。中の柱に寄り掛かって座って、脇息の上にお経を置いて、とても大儀そうに読経している尼君は、普通の人とは見えない。四十過ぎくらいで、とても色白で上品で、痩せてはいるが、頬はふっくらとして、目もとのぐあいや、髪がきれいに切り揃えられている端も、かえって長いのよりも、この上なく新鮮な感じだ、と感心して御覧になる。

小綺麗な女房二人ほど、他には童女が出たり入ったりして遊んでいる。その中に、十歳くらいか見えて、白い桂に、山吹襲などの、糊気の落ちたのを着て、駆けてきた女の子は、大勢見えた子供とは比べものにならず、たいそう将来性が見えて、かわいらしげな姿である。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、顔はとても赤くこすって立っている。

「どうしたの。童女とけんかをなされたの」
「とって、尼君が見上げているのに、少し似ているところがあるので、その子どもなのだろう」と御覧になる。

「雀の子を、犬君が逃がしちゃったの。伏籠の中に、閉じ籠めていたのに」と言つて、とても残念がっている。ここに座っていた女房は、
「いつもの、うっかり者が、このようなことをして、責められるとは、ほんと困ったことね。どこへ行ってしまいましたか。とてもかわいく、だんだんなつてきましたものを。烏などが見つけたら大変だわ」

「とって、立って行く。髪はゆつたりとても長く、見苦しくない女のようにある。少納言の乳母と皆が言うようなのは、この子のご後見役なのだろう。」

尼君が、
「何とまあ、幼いことを。聞き分けもなくいらつしやること。わたしが、このように、今日明日にも思われる寿命を、何とも考えにならず、雀を追いかけていらつしやるお年よ。罪を得ることですよと、いつも申し上げていますのに。情けなく」と言つて、「こちらへ」と言つと、ちょこんと座つた。顔つきがとてもかわいらしげで、眉のあたりがほんのりとして、子供つ

ぽく掻き上げた額つきや、髪が生え際は、大変にかわいらしい。成長して行くさまが楽しみな人だなあ」と、お目がとまりなさる。それと言つのも、限りなく心を尽くし申し上げている方に、とてもよく似ているので、目が引きつけられるのだ」と、思うにつけても涙が落ちる。

尼君が、髪をかき撫でながら、
「梳くことをお嫌がりになるが、美しい御髪ですね。とても子供っぽくいらつしやるのが、かわいそうで心配です。これほどになれば、とてもこんなでない人もありますものを。亡くなった母君は、十歳程で父殿に先立たれなされた時、たいそう物事の意味は弁えていらつしやいましたよ。この今、わたしがお残し申して逝ってしまったら、どのように過ごして行かれるおつもりなのでしょう」

「とって、たいそう泣くのを御覧になると、何とも言えず悲しい。子供心にも、やはりじつと見つめて、伏目になってうつつむいているところに、こぼれかかった髪が、つやつやとして素晴らしく見える。」

「これからどこでどう育つて行くのかも分からない若草を、残しては死ぬに死ねない思いです」

もう一人の座っている女房が、「本当に」と、涙ぐんで、
「初草のご成長も御覧にならないうちに、どうして先立たれるようなことをお考えになるのでしょうか」

と申し上げているところに、僧都が、あちらから来て、
「ここは人目につくのではないのでしょうか。今日に限って、端近にいらつしやいますね。この上の聖の所に、源氏中将が瘧病のまじないにいらつしやったのを、たった今、聞きつけました。ひどくお忍びでいらつしやったので、知りませんで、ここにおりながら、お見舞いにも上がりませんでした」とおつしやる。

「まあ大変。とても見苦しい様子を、人に見られたかしら」と言つて、簾を下ろしてしまつた。

「世間で、大評判でいらつしやる光源氏を、この機会に拝見なさいませんか。俗世を捨てた法師の気持ちにも、たいそう世俗の憂えを忘れ、寿命が延びるご様子の方です。どれ、お見舞いに参上しよう」と言つて、立ち上がる音がするので、お帰りになった。

「心惹かれる人を見たなあ。これだから、この好色な連中は、このような外歩きばかりをして、よく意外な人を見つけるのだな。まれに外出しただけでも、このように思いがけないことに出会うことよ」と、興味深くお思いになる。「それにしても、とてもかわいかった少女であるよ。どのような人であろう。あのお方の代わりとして、毎日の慰めに見たいものだ」という考えが、強く起こった。

横になっていらつしやると、僧都のお弟子が、惟光を呼び出させる。狭い所なので、源氏の君もそのままお聞きになる。

「お立ち寄りあそばしていらつしやることを、たった今、人が申すによって、知りながら、ご挨拶に伺うべきところを、拙僧がこの寺におりますことを、ご存知でいらつしやりながらも、お忍びでいらしていることを、お恨みに存じまして。旅のお宿も、拙僧の坊でお支度致しますべきでしたのに。残念至極です」と申し上げなされた。去る十何日のころから、瘧病を患つていますが、度重なつて我慢できませんので、人の勧めに従つて、急遽訪ねて参りましたが、このような方が効験を現さない時は、世間体の悪いことになるにちがいないのも、普通の人の場合以上に、お気の毒と遠慮致しまして、ごく内密に参つたのです。今、そちらへも」とおっしゃった。

折り返し、僧都が参上した。法師だが、とても気がおけて人品も重々しく、世間からもご信頼されていらつしやる方なので、軽々しいお姿を、きまり悪くお思いになる。このように籠っている間のお話などを申し上げなされた。「同じ草庵ですが、少し涼しい遣水の流れも御覧に入れましよう」と、熱心にお勧め申し上げなされるので、あの、まだ自分を見ていない人々に大げさに吹聴していたのを、気恥ずかしくお思いになるが、かわいらしかった有様も気になつて、おいでになつた。

なるほど、とても格別に風流を凝らして、同じ木や草を植えていらつしやつた。月もないころなので、遣水に篝火を照らし、灯籠などにも火を灯してある。南面はとてもござつぱりと整えていらつしやる。空薫物が、奥ゆかしく薫つて来て、名香の香など、匂い満ちているところに、源氏の君のおん追い風がとても格別なので、奥の人々も気を使つていられる様子である。

僧都は、この世の無常のお話や、来世の話などを説いてお聞かせ申し上げなされる。「自分の罪障の深さが恐ろしく、どうにもならないことに心を奪われて、一生涯このことを思い悩み続けなければならないようだ。まして来世は大変なことになるにちがいない」。お考え続けて、このような出家生活もしたく思われる一方では、昼間の面影が心にかかつて恋しいので、「ここにおいでの方は、どなたですか。お尋ね申したい夢を拝見しましたよ。今日、思い当たりました」

と申し上げなされると、につこり笑つて、唐突な夢のお話というものでございますな。お知りあそばされたても、きつとごつかりあそばされることでございませう。故按察使大納言は、世に亡くなつて久しくなりましたので、ご存知ありますまい。その北の方が拙僧の妹でございます。あの按察使が亡くなつて後、出家しておりますのが、最近、患うことがございましたので、こうして京にも行けませんので、頼りにして籠っているでございます」とお申し上げになる。

「あの大納言のご息女が、おいでになると伺つておりましたのは、好色めいた気持ちからではなく、真面目に申し上げるのです」と当て推量におつしやると、

「娘がただ一人おりました。亡くなつて、ここ十何年になりました。故大納言は、入内させようなどと、大変大切に育てていきましたが、その本願のようにもなりません、亡くなつてしまいましたので、ただこの尼君が一人で苦労して育てておりましたうちに、誰が手引をしたものか、兵部卿宮がこつそり通つて来られるようになったのですが、本妻の北の方が、ご身分の高い人であつたりして、気苦労が多くて、明け暮れ物思いに悩んで、亡くなつてしまいました。物思いから病気になるものだと、目の当たりに拝見致しました次第です」

などとお申し上げなされる。「それでは、その人の子であつたのだ」とご理解なされた。親王のお血筋なので、あのお方にもお似通い申しているのであるうかと、ますます心惹かれて妻にしたい。人柄も上品でかわいらしくて、なまじの小ざかしいところもなく、一緒に暮らして、自分の理想通りに育ててみたい」とお思いになる。

「とてもお気の毒なことではいらつしやいますね。その方には、後に残して行

かれた人はいないのですか」

と、幼な児の素性が、なお確かに知りたくて、お尋ねになると、

「亡くなりますころに、生まれました。それも、女の子で。それにつけても心配の種で、余命少ない年に思い悩んでいるようでございます」と申し上げなされる。

「やはりそうであつたか」とお思いになる。

「変な話ですが、その少女のご後見とお思い下さるよう、お話し申し上げていただけませんか。考えるところがつて、通つている本妻もおりますが、本当にしつくりいかないのでしょうか、独り暮らしばかりしています。まだ不似合いな年頃だと世間並の男同様にお考えになつては、体裁が悪い」などとおっしゃると、

「たいそう嬉しいはずの仰せ言ですが、まだいつこつに幼い年頃のようにございまして、ご冗談にも、お世話なされるのは難しいのでは。もっとも、女性には、人に世話されて一人前にもおなりになるものですから、詳しくは申し上げられませんが。あの祖母に相談しまして、お返事申し上げさせましょう」と、無愛想に言つて、こわこわとした感じでいらつしやるので、若いお心では恥ずかしくて、上手にお話し申し上げられない。

「阿弥陀仏のおいでになるお堂で、勤行のございます時刻です。初夜のお勤めを、まだ致しておりません。済ませて参りましょう」と言つて、お上りになつた。

源氏の君は、気分もとても悩ましいところに、雨が少し降りそそいで、山風が冷やかに吹いてきて、滝壺の水高も増して、音が大きく聞こえる。少し眠そつな読経が途絶え途絶えにぞつとするように聞こえるなども、何でもない人も、場所柄しんみりとした気持ちになる。まして、いろいろとお考えになることが多くて、お眠りになれない。初夜と言つたが、夜もたいそう更けてしまった。奥でも、人々の寝ていない様子がよく分かつて、とても密かにしているが、数珠の脇息に触れて鳴る音がかすかに聞こえ、ものやさしくそよめく衣ずれの音を、上品だとお聞きになつて、広くなく近いので、外側に立てめぐらしてある屏風の中を、少し引き開けて、扇を打ち鳴らしなされると、意外な気がするようだが、聞こえないふりもできようかということ、いざり出て来る人がいるようだ。少し後戻りして、

「おかしいわ、聞き違いかしら」と不審がつているのを、お聞きになつて、

「仏のお導きは、暗い中に入つても、決して間違つはずはありませぬものを」とおっしゃるお声が、とても若く上品なので、お返事する声つかいも、気がひけるが、

「どのお方への、ご案内でしょうか。分かりかねますが」と申し上げる。

「なるほど、唐突なことだとご不審になるのも、ごもつともですが、初草のごときうら若き少女を見てからは、旅寝の袖は恋しさの涙の露で濡れております」と申し上げて下さいませんか」とおっしゃる。

「まつたく、このようなお言葉を、頂戴して分かるはずの人もいらつしやらない有様は、ご存知でいらつしやりそうなのに。どなたに」と申し上げる。「自然と、しかるべきわけがあつて申し上げているのだからご考慮下さい」とおっしゃるので、奥に行つて申し上げる。

「まあ、華やいたことを。この姫君を、年頃でいらつしやると、お思いなのだろうか。それにしては、あの『若草』を、どうしてご存知でいらつしやることか」と、あれこれと不思議なので、困惑して、遅くなるので、失礼になると思つて、

「今晚だけの旅の宿で涙に濡れていらつしやるからといって、わたしたちのことを引き合いに出さないでくださいまし、乾きそつにごさいますのに」とご返歌申し上げなされる。

「このような機会のご挨拶は、まだまつたく致したことがなく、初めてのことで。恐縮ですが、このような機会に、真面目にお話させていただいたことがありません」と申し上げなされると、尼君、

「聞き違いなさつていらつしやるのでしよう。まことに厄介なお方に、何をお返事申せましょう」とおっしゃると、

「間の悪い思いをおさせになつては」と女房たちが申す。「なるほど、若い人なら嫌なことでしょうが、真面目におっしゃるとは、恐れ多い」と言つて、いざり寄りなさつた。

突然で、軽薄な振る舞いと、きつとお思いになられるにちがいないような時ですが、わたし自身にはそのように思われませんので。仏はもとより」と言つたが、落ち着いていて、気の置ける様子に氣後れして、すぐには

お切り出しになれない。

「おっしゃるとおり、思い寄りも致しませぬ機会に、こうまでおっしゃっていただいたり、お話させていただけますのも、どうして」とおっしゃる。

「お気の毒な身の上と承りましたご境遇を、あのお亡くなりになった方のお代わりと、お思いになって下さいませんか。幼いころに、かわいがつてくれるはずの母親に先立たれましたので、妙に頼りない有様で、年月を送つて来ました。同じような境遇でいらつしやるというので、お仲間にしていただきたいと、心から申し上げたいのですが、このような機会がめつたにございませので、どうお思いになられるかもかまわずに、申し出たのでございませ」と申し上げなさると、

「とても嬉しく存じられるはずのお言葉ですが、お聞き違えていらつしやる事がございませんでしうかと、憚られるのです。年寄一人を頼りにしている孫がございませが、とてもまだ幼い年頃で、大目に見てもらえるところもございませんようなので、お承りおくことができません」とおっしゃる。

「みな、はつきりと承知致しておりますものを。窮屈にご遠慮なさらず、深く思つております格別な心のほどを、御覧下さいませ」

と申し上げなさるが、まだとても不似合いなことを、そうとも知らないでおっしゃる、とお思いになって、打ち解けたご返事も無い。僧都がお戻りになつたので、

「それでは、このように申し上げましたので、心丈夫です」と言つて、お立てになつた。

暁方になつたので、法華三昧を勤めるお堂の懺法の声が、山下ろしの風に乗つて聞こえて来るのが、とても尊く、滝の音に響き合つている。

「深山おろしの懺法の声に煩惱の夢が覚めて 感涙を催す滝の音であることよ」

「不意に來られてお袖を濡らされたという山の水に 心を澄まして住んでいゝるわたしは驚きませせん 耳慣れてしまつたからでしうか」と申し上げなされる。

「第五段 翌日、迎えの人々と共に帰京」

明けて行く空は、とてもたいそう霞んで、山の鳥どもがどこかしことなく囀り合つている。名も知らない木や草の花々が、色とりどりに散り混じり、錦を敷いたと見える所に、鹿があちこちと歩き回つているのも、珍しく御覧になると、気分の悪いのもすつかり忘れてしまつた。

聖は、身動きも不自由だが、やつこのことで護身法をして差し上げられる。しわがれた声が、とてもひどく齒の間から洩れて聞きにくいのも、しみじみと尊くて、陀羅尼を誦していた。

お迎えの人々が参つて、ご回復されたお喜びを申し上げ、帝からもお見舞いがある。僧都は、見慣れないような果物を、あれこれと、谷の底から採つてきては、ご接待申し上げなさる。

「今年いっぱいの誓いが固うございまして、お見送りに参上できませんことを、かえつて残念に存じられてなりません」

などと申し上げなさつて、大御酒を差し上げなさる。

「山や谷川に心意かれましたが、帝にご心配あそばされますのも、恐れ多いことですので。そのうち、この花の時期を過ごさずに参りましょう。」

大宮人に歸つて話して聞かせましよう、この山桜の美しいことを 風の吹き散らす前に來て見るようにと

とおっしゃる態度や、声づかいまでが、眩しいくらい立派なので、

「三十年に一度咲くという優曇華の花の 咲くのにめぐり逢つたような気がして深山桜には目も移りませせん」

と申し上げなさると、微笑みなさつて、

「その時節に至つて、一度咲くという花は、難しいものでしょうに」とおっしゃる。

聖は、お杯を頂戴して、

「奥山の松の扉を珍しく開けましたところ まだ見たこともない花のごとく美しいお顔を拝見致しました」

と、ちよつと感涙に咽んで押し上げる。聖は、ご守護に、独鈷を差し上げる。それを御覧になつて、僧都は、聖徳太子が百濟から得られた金剛子の数珠で、玉の飾りが付いているのを、そのままその国から入れてあつた箱で、唐風なのを、透かし編みの袋に入れて、五葉の松の枝に付けて、紺瑠

璃の壺々に、お薬類を入れて、藤や桜などに付けて、場所柄に相応しいお贈物類を、捧げて差し上げなされる。

源氏の君は、聖をはじめとして、読経した法師へのお布施類、用意の品々を、いろいろと京へ取りにやっていたので、その周辺の山賤にまで、相応の品物をお与えになり、御誦經の布施をしてお出になる。

室内に僧都はお入りになって、あの申し上げなされたことを、そのままお伝え申し上げなされるが、

「何とも、今すぐには、お返事申し上げようがありません。もし、お気持ちがあるならば、もう四、五年たつてから、ともかくも」とおっしゃると、「しかしか」と同じようにばかりあるので、つまらないとお思いになる。

お手紙は、僧都のもとに仕える小さい童にこつつけて、「昨日の夕暮時にわずかに美しい花を見ましたので、今朝は霞の空に立ち去りがたい気がします」

お返事、

「本当に花の辺りを立ち去りにくいのでしょうか、そのようなことをおっしゃるお気持ちを見たいものです」

と、教養ある筆跡で、とても上品なのを、無造作にお書きになっている。お車にお乗りになるころに、大殿から、「どこへ行くともなくて、お出かけあそばしてしまつたこと」と言つて、お迎えの供人、ご息たちなどが大勢参上なされた。頭中将、左中弁、その他のご息もお慕い申して、「このようなお供には、お仕え申ししようと、存じておりますのに。あまりな、お見捨てあそばすとは」とお怒み申して、「とても美しい花の下に、しばしの間も足を止めずに、引き返しますのは、もの足りない気がしますね」とおっしゃる。

岩蔭の苔の上に並び座つて、お酒を召し上がる。落ちて来る滝水の様子など、趣のある滝のほとりである。頭中将は、懐にしていた横笛を取り出して、吹き澄ましている。弁の君は、扇を軽く打ち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」と謡う。普通の人よりは優れた公達であるが、源氏の君は、とても苦しうにして、岩に寄り掛かつておいでになるのは、またとなく不吉なまでに美しいご様子なので、他の何人にも目移りしそくないのであつた。いつものように、筆簞を吹く隨身、笙の笛を持たせている風流人など

もいる。

僧都は、七絃琴を自ら持つて来て、「これで、ちよつとひと弾きあそばして、同じことなら、山の鳥を驚かしませう」

と熱心にこそ望み申し上げなされるので、「気分が悪いので、とてもできませんのに」とお答え申されるが、ことに無愛想にはならない程度に掻き鳴らして、一行はお立ちになった。

名残惜しく残念だと、取るに足りない法師や、童子も、涙を落とさ合つていた。まして、室内では、年老いた尼君たちなどは、まだこのようにお美しい方の姿を見たことがなかつたので、「この世の人とは思われなさらぬい」とお噂申し上げ合つていた。僧都も、

「ああ、どのような因縁で、このような美しいお姿ながら、まことにむさ苦しい日本の末世にお生まれになつたのであろうと思つと、まことに悲しい」と言つて、目を押し拭いなされる。

この若君は、子供心に、「素晴らしい人だわ」と御覧になつて、「父宮のお姿よりも、優れていらつしやいますわ」などとおっしゃる。

「それでは、あの方のお子様におなりあそばされませ」と申し上げると、「こつくりと頷いて」ともすてきなことだわ」とお思ひになつていられる。お人形遊びにも、お絵描きなされるにも、「源氏の君」と作り出して、美しい衣装を着せ、お世話なされる。

「第六段 内裏と左大臣邸に参る」

源氏の君は、まず内裏に参内なさつて、「ここ数日來のお話などを申し上げなされる」とてもひどくお瘦せになつてしまつた」とおっしゃつて、「ご心配あそばされた。聖の靈験あらたかであつたことなどを、お尋ねあそばす。詳しく奏上なされると、

「阿闍梨などにも当然なるはずの人であつたな。修行の功績は大きいのに、朝廷からご存知になられなかつたとは」と、大事にしてやりたく仰せられるのであつた。

大殿が、参内なさつておられて、

「お迎えにもと存じながら、お忍びの外出なので、どんなものかと遠慮して。のんびりと、一、二日、お休みください」と言つて、「このまま、お供申しましよ」と申し上げなされるので、そうしたいとは思ひにならないが、連れられて退出なされる。

「ご自分のお車にお乗せ申し上げなさつて、自分は遠慮してお乗りになる。大切にお世話申し上げなされるお気持ちの有り難いことを、やはり胸のつまりの思いがするのであつた。

大殿邸でも、おいであそばすだらうとご用意なさつて、久しくお見えにならないうちに、ますます玉の台のように磨き上げ飾り立て、用意万端ご準備なさつていた。

女君は、例によつて、物蔭に隠れて、すぐには出ていらつしやらないのを、父大臣が、強くご催促申されて、やつと出ていらつしやつた。まるで絵に描いた姫君のように、座らされて、ちよつと身体をお動かしになることも難しく、きちんと言儀よく座つていらつしやるので、心の中の思いを話したり、北山行きの話をもお聞かせたりする、話のしがいがあつて、興味をもつてお返事をなさつて下さるものなら、情愛もわこうが、少しも打ち解けず、よそよそしく氣づまりな相手だと思ひになつて、年月を過すにつれて、お気持ちの隔たりが増さるのを、とても辛く、心外なので、

「時々、世間並みのご様子を見たいね。ひどく苦しんでおりました時にもせめていかがですかとだけでも、お尋ね下さらないのは、今に始まつたことではありませんが、やはり残念です」

と申し上げなされる。ようやくのことので、

「尋ねないのは、辛いものなのでしょうが」

と、流し目に御覧になつてゐる目もと、とても氣後れがしそうで、氣品高く美しそうな容貌である。

「たまさかにおつしやるかと思へば、心外なお言葉ですね。訪ねない、などという問柄は、他人が使う言葉でございませう。嫌なふうにおつしやいますね。いつまでたつても変わらない体裁の悪い思いをさせるご態度を、もしや、お考え直しになるときもあるつかと、あれやこれやお試し申してゐるうちに、ますますお疎んじなされたようですね。仕方ない、長生きさえしたら」

と言つて、夜のご寢所にお入りになつた。女君は、すぐにもお入りにならず、お誘ひ申しあぐねなさつて、溜息をつきながら横になつてゐるもの、何となくおもしろくないのであつつか、眠そふなふりをなさつて、あれやこれやと思ひ悩まれることが多かつた。

あの若草の君が成長していく間がやはり気にかかるので、まだ相應しくない年頃と思つてゐるのも、もつともである。申し込みにくいものだなあ。何とか手段を講じて、ほんの氣樂に迎へ取つて、毎日の慰めとして一緒に暮らしたい。兵部卿宮は、とても上品で優美でいらつしやるが、つややかなお美しさはないものを。どうして、あの一族に似ていらつしやるのだから。同じお后様からお生まれになつたからだつつか「などとお考へになる。血縁がとても親しく感じられて、何とかしてと、深く思われる。

「第七段 北山へ手紙を贈る」

翌日、お手紙を差し上げなさつた。僧都にもそれとなくお書きになつたのであつた。尼上には、

「取り合つて下さらなかつたご様子に気がひけますので、思つておりますことを、十分に申せずじまいになりましたことを。これほどに申し上げていますのにつけても、並々ならぬ気持ちのほどを、お察しいただけたら、どんなに嬉しいことなのでしょうが」

などと書いてある。中に、小さく結んで、

「山桜の美しい姿はわたしの身を離れませんが、心のすべてをそちらに置いて来たのですが、夜の間の風が、心配に思われまして」

と書いてある。ご筆跡などはさすがに素晴らしくて、ほんの無造作にお包みになつた様子も、年配の人々のお目には、眩しいほどに素晴らしく見える。

「まあ、困つたこと。どのようにお返事申し上げませう」と、お困りになる。

「先日の行きがかりのお話は、ご冗談ごとと存じられましたが、わざわざお手紙を頂戴いたしましたのに、お返事の申し上げようがなくて。まだ「難波津」をさえ、ちゃんと書けませぬようなので、お話になりませぬ。それ

にしても、激しい山風が吹いて散つてしまふ峰の桜に、その散る前にお氣持ちを寄せられたように頼りなく思われます。ますます気がかりです。」

とある。僧都のお返事も同じようなので、残念に思つて、「二、三日たつて、惟光を差し向けなさる。」

「少納言の乳母という人がいるはずだ。会つて、詳しく相談せよ。」などとお願い含めなさる。何とも、どのようなことにもご関心を寄せられる好き心だなあ。あれほど子供じみた様子であつた様子なのに」と、はつきりではないが、見た時のことを思い出すとおかしい。

わざわざ、このようにお手紙があるのを、僧都も恐縮の由申し上げなさる。少納言の乳母に申し入れて面会した。詳しく、お考えになつておっしゃつた様子や、口頃の様子などを話す。多弁な人なので、もっともらしくいろいろ話し続けるが、「とても無理なお年なのに、どのようにお考えなのか」と、大変心配なことで、誰も彼もお思いになるのであつた。

お手紙にも、とても心こめてお書きになつて、いつものように、その中に、「あの一字一字のお書きなのを、もっと拝見したい」とあつて、「浅香山のように浅い氣持ちで思つてゐるのではないのに、どうして相手になつて下さらないのでしょうか。」

お返事、
「うっかり薄情な人と契りを結んで後悔したと聞きました山の井のような浅いお心のままどうして孫娘を御覧に入れられましよう。」

惟光も同じ意味のご報告を申し上げます。
「このご病氣が回復したら、しばらくして、京のお邸にお帰りになつてから、改めてお返事申し上げます。」とあるのを、待ち遠しくお思いになる。

第二章 藤壺の物語 夏の密通と妊娠の苦惱物語

「第一段 夏四月の短夜の密通事件」

藤壺の宮に、「ご不例の事があつて、ご退出されていた。主上が、お氣をままれ、ご心配申し上げていらつしやる様子も、まことにおいたわしく

拝見しながらも、せめてこのような機会にと、魂も浮かれ出て、どこにもかしこにもお出かけにならず、内裏にいても里邸にいても、昼間は所在なくぼつと物思いに沈んで、夕暮れになると、王命婦にあれこれとおせがみになる。

どのように手引したのか、とても無理してお逢い申している間さえ、現実とは思われないのは、辛いことである。宮も、思いもしなかつた出来事をお思い出しになるだけでも、生涯忘れることのできないお悩みの種なので、せめてそれきりで終わりにしたいと深く決心されていたのに、とても情けなくて、ひどく辛そうなお様子でありながらも、優しくいじらしくて、そうかといつて馴れ馴れしくなく、奥ゆかしく氣品のあるご態度などが、やはり普通の女人とは違つていらつしやるのが、どうして、わずかの欠点すら少しも混じつていらつしやらないのだろう」と、辛くまでお思いになられる。どのようなことをお話し申し上げきれようか。鞍馬の山に泊まりたいところだが、あいにくの短夜で、情けなく、かえつて辛い逢瀬である。

「お逢いしても再び逢つごとの難しい夢のようなこの世なので、夢の中にそのまま消えてしまふわが身であつてほしい。」
と、涙にむせんでいられる様子も、何と言つてもお氣の毒なので、

「世間の語り草として語り伝えるのではないでしょううか、この上なく辛い身の上を覚めることのない夢の中のこととしても」

お悩みになつてゐる様子も、まことに道理で恐れ多い。命婦の君が、お直衣などは、取り集めて持つて来た。

お邸にお帰りになつて、泣き臥してお暮らしになつた。お手紙なども、例によつて、御覧にならない旨ばかりなので、いつものことながらも、全く茫然自失とされて、内裏にも参内せず、「二、三日閉じ籠つていらつしやるので、また、どうかしたのだろうか」と、ご心配あそばされてゐるらしいのも、恐ろしいばかりに思われなさる。

「第二段 妊娠三月となる」

宮も、やはり実に情けないわが身であつたと、お嘆きになると、ご氣分の悪さもお加わりになつて、早く参内なさるようにとの御勅使が、しきり

にあるが、ご決心もつかない。

本当に、ご気分が、普段のようにおいであそばさないので、どうしたとかと、密かにお思い当たることもあつたので、情けなく、どうなることだろつか」とばかりお悩みになる。

暑い日は、ますますお起きにならない。三か月におなりになるので、とてもよく分かるようになって、女房たちもそれとお気付き申すのも、思いもかけないご宿縁のほどが、恨めしい。他の人たちは、思いもよらないことなので、「この月まで、ご奏上あそばされなかつたこと」と、意外なことにお思い申し上げる。ご自身一人には、はつきりとお分かりになる節もあるのであつたのだ。

お湯殿などにも身近にお仕え申し上げて、どのような様子もはつきり存じ上げている、おん乳母子の弁や、命婦などは、変だと思つが、お互いに口にすべきことではないので、やはり逃れられなかつたご運命を、命婦はただ驚いている。

帝に対しては、おん物の怪のせい、すぐには兆候がなくあそばしたように奏上したのである。周囲の人もそうとばかり思つていた。ますますこの上なく愛しくお思いあそばして、御勅使などがひつきりなしにあるのも、空恐ろしく、物思いの休まる時もない。

源氏中将の君も、ただごとではない異様な夢を御覧になつて、夢解きをする者呼んで、ご質問させなされると、及びもつかない思いもかけない方面のことを判断するのであつた。

「その中に、順調に行かないところがあつて、お身を慎みあそばさなければならぬことがございます」

と言つので、面倒に思われて、

「自分の夢ではない、他の方の夢を申すのだ。この夢が現実となるまで、誰にも話してはならぬ」

とおつしやつて、心中では、「どのようなことなだらう」とお考えめぐらしている、この女宮のご懐妊のことをお聞きになつて、「もしやそのよくなことか」と、お思い合わせになると、ますます熱心に言葉のあらん限りを尽くして申し上げなさるが、命婦も考えると、まことに恐ろしく、難儀な気持ちが増してきて、まったく逢瀬を手立てする方法がない。ほんの

一行のお返事がまれにはあつたのも、すっかり絶えはててしまった。

「第三段 初秋七月に藤壺宮中に戻る」

七月になつて参内なさつた。珍しい事で感動深く、以前にも増す御寵愛ぶりはこの上もない。少しふつくらとおなりになつて、ちよつと悩ましげに、面瘦せしていらつしやるのは、まことにまたとなく素晴らしい。

例によつて、明け暮れ、こちらにばかりお出ましになつて、管弦の御遊もだんだん興の乗る季節なので、源氏の君も暇のないくらいお側にたびたびお召しになつて、お琴や、笛など、いろいろとご命あそばす。つとめてお隠しになつてゐるが、我慢できない気持ちの外に現れ出してしまう折々、宮も、さすがに忘れられない事どもをあれこれとお思い悩み続けていらつしやるのであつた。

第三章 紫上の物語（二） 若紫の君、源氏の二条院邸に盗み出される物語

「第一段 紫の君、六条京極の邸に戻る」

あの山寺の人は、少しよくなつてお出になられたのであつた。京のお住まいを尋ねて、時々お手紙などがある。同じようにはかり返事するのをもつともなところ、ここ何月、以前にも増す物思いによつて、他の事を思う間もなく過ぎて行く。

秋の終わりころ、とても物寂しくお嘆きになる。月の美しい夜に、お忍びの家にやつたこととお思い立ちになると、時雨めいてさつと降る。おいでになる所は六条京極辺りで、内裏からなので、少し遠い感じがするが、荒れた邸の木立がとて鬱蒼と茂つて木暗く見えるのがある。いつものお供を欠かさない惟光が、

「故按察大納言の家でございまして、ちよつとしたついでに立ち寄りまして、あ、あの尼上は、ひどく衰弱されていらつしやるので、どうして良

「いか分らないでいる」と申しておりました」と申し上げると、

「お気の毒なことよ。お見舞いすべきであったのに。どうして、そうと教えなかったのか。入って行って、来意を告げよ」

とおっしゃると、人を入れて案内を乞わせる。わざわざこのようにお立ち寄りになった旨を言わせたので、入って行って、

「このようにお見舞いにいらっしやいました」と言つと、驚いて、

「とても困ったことですね。ここ数日、ひどく衰弱めそばされましたので、お目にかかることなどはとてもできそうにありません」

「と言つても、お歸し申すのも恐れ多いことです」

と言つて、南の廂の間を片づけて、お入れ申し上げる。

「たいそうむさ苦しい所でございますが、せめてお礼だけでもとのこと。何の用意もなく、奥まつたご座所で恐縮です」

と申し上げる。なるほどこのような所は、普通とは違つていとお思ひになる。

「常にお見舞いにと存じながら、すげないお返事ばかりあそばされますので、遠慮いたされまして。ご病気でいらつしやること、重いこととも、存じませんでしたもどかしさを」などと申し上げなされる。

「自分のすくれませんかとは、いつも変わらなすでございますが、いよいよの際となりまして、まことにもつたいなくも、お立ち寄りいただきましたのに、自分自身でお礼申し上げられませんか。仰せられますお話の旨は、万一にもお気持ちが変わらないようでしたら、このような頑是ない時期が過ぎましてから、きつとお目をかけて下さいませ。ひどく頼りない身の上のまま残して逝きますのが、願つております仏道の妨げに存ぜずにはいられません」などと、申し上げなされた。

「まことに、もつたいないことでございます。せめてこの君が、お礼申し上げなされるお年でありましたならよいのに」

とおっしゃる。しみじみとお聞きになつて、

「どうして、浅はかな気持ちから、このような好色めいた態度をお見せ申し上げましようか。どのような宿縁でか、初めてお目にかかった時から、愛しくお思ひ申しているのも、不思議なほど、この世のこととは思われませ

ん」などとおっしゃつて、いつも甲斐ない思ひばかりしていただきますので、あ

のかわりらしくいらつしやるお一声を、せひとも」とおっしゃると、

「さあ、何もご存知ないさまで、お寝みになつていらつしやつて」

などと、申し上げていたちよつごその時、あちらの方からやつて来る足音がして、

「祖母上さま、あの寺にいらした源氏の君さまがいらしているそうですね。どうしてお会いさらないの」

とおっしゃるのを、女房たちは、とても具合悪く思つて、お静かに」と制止申し上げる。

「あら、だつて、会つたら気分が悪いのも良くなつた」とおっしゃつたら、

と、利口なことを申し上げたとお思ひになつておっしゃる。

とてもおもしろいとお聞きになるが、女房たちが困つているので、聞かないようにして、行き届いたお見舞いを申し上げおかれて、お歸りになつた。なるほど、まるで子供つばいご様子だ。けれども、よく教育しようとお思ひになる。

翌日も、とても誠実なお見舞いを差し上げなされる。いつものように、小さく結んで、かわいい鶴の一声を聞いてから、葦の間を歩き悩む舟はただならぬ思ひをしています。同じ人を

と、殊更にかわいくお書きになつていられるのも、たいそう見事なので、そのままお手本に」と、女房たちは申し上げる。少納言がお返事申し上げた。

「お見舞いいただきました方は、今日一日も危いような状態です、山寺に移るところです。このようにお見舞いいただきましたお礼は、あの世からでも差し上げましよう」

とある。とてもお気の毒とお思ひになる。

秋の夕べは、常にも増して、心も休まる間もなく恋焦がれている人のことに考えが集中して、無理にでもそのゆかりの人を尋ね取りたい気持ちもお募りなされるのであろう。死にきれない」と詠んだ夕べをお思ひ出しになられて、恋しく思つても、また、実際一緒になつたら見劣りがしないだろうかと、やはり不安である。

手に取つて早く見たいものだ。紫草にゆかりのある野辺の若草を「

「第二段 尼君死去し寂寥と孤独の日々」

神無月に朱雀院への行幸があるのである。舞人などを、高貴な家柄の子弟や、上達部、殿上人たちなどの、その方面で適当な人々は、皆お選びあそばされたので、親王たちや、大臣をはじめとして、それぞれ伎芸を練習をなさり、暇がない。

山里の人にも、久しくご無沙汰なさっていたのを、思い出しになって、わざわざお遣わしになったところ、僧都の返事だけがある。

「先月の二十日」に、とうとう臨終をお見届けいたしました。人の世の宿命だが、悲しく存じられます」

などあるのを御覧になると、世の中の無常をしみじみと思われて、心配していた人もどうしているだろう。子供心にも、恋い慕っているだろうか。亡き母御息所に先立たが、などと、はつきりではないが、思い出して、丁重にお弔いなさった。

少納言の乳母が、嗜みのある返札などを申し上げた。

忌みなどが明けて京の邸になどとお聞きになったので、暫くしてから、ご自身で、お暇な夜にお出かけになった。まことにぞつとするくらい荒れた所で、人氣も少ないので、どんなに小さい子には怖いことだろうと思われ。いつもの所にお通し申して、少納言が、ご臨終の有様などを、泣きながらお話申し上げると、他人事ながら、お袖も涙でつい濡れる。

「宮邸にお引き取り申し上げようとの事でございますが、亡き姫君が、とても情愛のない、嫌な人と、お思い申していらしたのに、まったく子供というほどではないが、まだしつかりと人の意向を聞き分けもおできにならず、中途半端なお年頃で、大勢いらつしゃるといって、軽んじられてお過ごしになるのではないか、などと、お亡くなりになった方も、始終ご心配されていらしたと、明白なことが多くございますので、このようにもつたいたないただ今のお言葉は、後々のご配慮までもご推察申さずに、とても嬉しく存じられるはずの時ではございますが、全く相応しい年頃でいらつしゃらないし、お年のわりには幼くていらつしゃいますので、とてもはらはらしております」と申し上げる。

のでしよう。その、幼いお考えの様子がかわいく愛しく思われなさるのも、宿縁が特別と、自分ながら思われるのです。やはり、人を介してではなく、お伝え申し上げたい。

若君にお目にかかることは難しかろうとも、和歌の浦の波のようにこのまま立ち帰ることはしません、失礼でしょう」とおつしゃると、なるほど、恐れ多いこと」と言つて、

和歌の浦に寄せる波に身を任せる玉藻ように、相手の気持ちをよく確かめ、もせずに従うことは頼りないことです、困りますこと」と

と申し上げる態度がもの馴れているので、すこし大目に見る気になられる。どうして逢わずにいられようか」と、口ずさみなさるのを、ぞくぞくとして若い女房たちは思っている。

若君は、祖母上をお慕い申されて泣き臥していらつしゃったが、お遊び相手たちが、直衣を着ている方がいらしているのは、父宮さまがおいでであそばしたのらしいわ」

と申し上げると、起き出しなさつて、

「少納言よ、直衣を着ているという方は、どちら。父宮がいらしたの」と言つて、近づいて来るお声が、とてもかわいらしい。

「宮さまではありませんが、必ずしも関係ない人ではありません。こちらへ」とおつしゃるので、あの素晴らしかった方だと、子供心にも聞き分けて、まずいことを言ってしまったとお思いになって、乳母の側に寄つて、

「ねえ、行きましようよ。眠いから」とおつしゃると、

「今さら、どうして逃げ隠れなさるのでしよう。わたしの膝の上でお寝みなさいませ。もう少し近くへいらつしゃい」

とおつしゃると、乳母が、

「これですから。このようにまだ頑はないお年頃です」

と、押しやり申したところ、無心にお座りになったので、お手を差し入れてお探りになると、柔らかなお召物の上に、髪がつやつやと掛かつて、末の方までふさふさしているのが、とてもかわいらしく想像される。お手を捉えなされると、気味の悪いよその人が、このように近くにいらつしゃるのは、恐ろしくなつて、

「寝よう、と言っているの」

と言つて、無理に奥に入つて行きなされるのに、後から付いて御簾の中にすべり入つて、

「今は、わたしが世話して上げる人ですよ。お嫌いにならないでね」

とおつしやる。乳母が、

「あら、嫌でございませぬ。あまりのなさりようでございませぬ。いくらお話し上げあそばしても、何の甲斐もございませぬでしょうに」といつて、つらそうに困つてゐるので、

「いくらなんでも、このようなお年の方をどうしようか。やはり、ただ世間になほどの愛情をお見届けください」とおつしやる。

霰が降り荒れて、恐ろしい夜の様子である。

「どうして、このような小人数な所で、頼りなく過ごしていらつしやるのだらう」

と、ふとお泣きになつて、とても見捨てては歸りにくい有様なので、

「御格子を下ろしなさい。何となく恐ろしい夜の感じのようですから。宿直人になりましょう。女房たち、近くに参りなさい」

と言つて、とても物馴れた態度で御寢室の内側にお入りになるので、奇妙な思いも寄らないことをと、あつけにとられて、一同茫然としている。乳母は、心配で困つたことだと思つが、事を荒立て申すべき場合でないので、嘆息しながら見守つていた。

若君は、とても恐ろしく、どうなるのだらうと震えずにはいられず、とてもかわいらしいお肌も、ぞくぞくと栗立つ感じがなされるのを、いじらしく思われて、肌着だけで包み込んで、ご自分ながらも、一方では変なお気持ちになされるが、しみじみとお話なさつて、

「ねえ、いらつしやいよ。美しい絵などが多く、お人形遊びなどする所に」と、気に入らうなことをおつしやる様子が、とても優しいので、子供心にも、そう大して物怖じせず、とは言つても、気味悪くて眠れなく思われて、もじもじして横になつていらつしやう。

一晩中、風が吹き荒れているので、

「ほんとうに、このように、お越し下さらなかつたら、どんなに心細かつたことでしょう」

「同じことなら、お似合いの年であそばしたら」

とささやき合つてゐる。乳母は、心配なので、すぐ近くに控えている。風が少し吹き止んだので、夜の深いうちにお歸りになるのも、いかにもわけありそうな朝歸りであるよ。

「とてもお気の毒にお見受け致しましたご様子を、今では以前にもまして、片時の間も見なくては気がかりでならないでしょう。毎日物思いして暮らしている所にお迎え申し上げましょう。こうしてばかりいては、どんなものか。お恐がりにはならなかつた」とおつしやる。

「宮もお迎えになどと申していらつしやるようですが、この四十九日が過ぎたらからか、などと存じます」と申し上げると、

「頼りになる方ではあるが、ずっと別々に暮らして来られた方は、同じく疎々しくお思いでしょう。今夜初めてお会いしたが、深い愛情はより深いでしょう」

と言つて、かき撫でかき撫でして、後髪を引かれる思いでお出になつた。

ひどく霧の立ちこめた空もいつもとは違つた風情であるうえに、霜は真白に置いて、実際の恋であつたら興趣あるはずなのに、何か物足りない気がなされる。たいそう忍んでお通いになる方への道筋であつたのをお思ひ出しになつて、門を叩かせなされるが、聞きつける人がいない。しかたなく、お供の中で声の良い者に歌わせになされる。

「曙に霧が立ちこめた空模様につけても 素通りし難い貴女の家の前ですね」と、二返ほど歌わせたところ、心得ある下仕え人を出して、

「霧の立ちこめた家の前を通り過ぎ難いとおつしやるならば 生い茂つた草が門を閉ざしたことぐらゐ何でもないでしょうに」

と詠みかけて、入つてしまつた。他に誰も出て来ないので、帰るのも風情がないが、明るくなつて行く空も体裁が悪いので邸へお歸りになつた。

かわいらしかつた方の面影が恋しく、独り微笑みながら臥せていらつしやう。日が高くなつてからお起きになつて、手紙を書いておやりになる時、書くはずの言葉も普通と違つたので、筆を書いては置き書いては置きと、気の向くままにお書きになつてゐる。美しい絵などをお届けなされる。

あちらでは、ちようど今日、宮がおいでになつた。数年来以上にすっかり荒れ行き、広く古めかしくなつた邸が、ますます人数が少なくなつて月日を経ているので、ずっと御覽になつて、

「このよつな所には、どうして、少しの間でも幼い子供がお過しになれようやはり、あちらにお引き取り申し上げよう。けつして窮屈な所ではない。乳母には、部屋をもらって仕えればよい。姫君は、若い子たちがいるので、一緒に遊んで、とても仲良くやって行けよう」などとおっしゃる。

近くにお呼び寄せになると、あのおん移り香が、たいそうよい匂いに染み着いていらつしやるので、いい匂いだ。お召し物はすっかりくたびれているが」と、お気の毒にお思いになった。

「これまでは、病気がちのお年寄と一緒においでになったことよ、あちらに引越してお馴染みなさいなどと、言っていました。変にお疎んじなさつて、妻もおもしろからぬようでしたが、このような機会に移つて来られるのも、おかわいそつで」などとおっしゃると、

「どう致しまして。心細くても、今暫くはこうしておいであそばしましょう。もう少し物の道理がお分りになりましたら、お移りあそばされることが良うございましょう」と申し上げる。

「夜昼となくお慕い申し上げなさつて、ちよつとした物もお召し上がりになりません」

と申して、なるほど、とてもひどく面瘦せなさつてはいるが、まことに上品でかわいらしく、かえつて美しくお見えになる。

「どうして、そんなにお悲しみなさる。今はもうこの世にいない方のことは、しかたがありません。わたしがいれば」

などとお話申し上げなさつて、日が暮れるとお帰りあそばすのを、とても心細いとお思いになつてお泣きになると、宮はもらい泣きなさつて、けつして、そんなに「心配なさるな。今日明日のうちに、お移し申そう」などと、繰り返しなだめすかして、お帰りなさつた。

その後の寂しさも慰めようがなく泣き沈んでいらつしやつた。将来の身の上のことなどはお分りにならず、ただ長年離れることなく一緒にいて、今はお亡くなりになつてしまつたと、お思いになるのが悲しくて、子供心であるが、胸がいつぱいにふさがつて、いつものようにもお遊びはなさらず、昼間はどうかお紛らわしになるが、夕暮時になると、ひどくおふさぎこみなさるので、これではどのようにお過ごしになられようかと、慰めあぐねて、乳母も泣いていた。

源氏の君のお側からは、惟光をお差し向けなさつた。

「自身参るべきところ、帝からお召しがありまして。お気の毒に拝見致しましたのにつけても、気がかりで」と伝えて、宿直人を差し向けなさつた。

「情けないことですよ。」「冗談にも結婚の最初からして、このようなお事は」

「宮さまがお耳にされたら、お仕える者の落度として叱られますよ」

「ああ、大変だわ。何かのついでに、うっかりお口にあそばされますな」

などと言つのも、そのことを何ともお分りでないが、困つた年齢である。

少納言の乳母は、惟光に気の毒な身の上話をいろいろとして、

「これから先、一緒になるような縁からは、お逃れ申されなさいものかも知れません。ただ今は、まったく不釣り合いなお話と拝察致しておりますが、不思議にご熱心に思つてくださりおっしゃつてくださいますのを、どのようなお気持ちからかと、判断つかないで悩んでおります。今日も、宮さまがお越しあそばして、安心の行くように仕えなさい。うっかりしたことは致すな」と仰せられたのも、とても厄介で、なんでもなかつた時より、このような好色めいたことも改めて気になるのでございまして」

などと云つて、この人も何か特別の関係があつたように思つたろうかと、

帰参して、様子をご報告すると、しみじみと思いを馳せになるが、先夜のようにお通いなさるのも、やはり似合わしくない気持ちにして、軽率な風変わりなことをしていると、世間の人が聞き知るかも知れない」などと、遠慮されるので、いっそ迎えてしまおう」とお考えになる。

お手紙は頻繁に差し上げなされる。暮れると、いつものように惟光大夫をお差し向けなされる。「差し障りがあつて参れませんが、不熱心などでも」

などと、伝言がある。

「宮さまから、明日急にお迎えに参ると仰せがありましたので、気ぜわしくて。長年住みなれた蓬生の宿を離れますのも、何と云つても寂しく、お仕える女房たちも思い乱れて」

と、言葉数少なに言つて、ろくにお相手もせず、繕い物をする様子が

はつきり分かるので、帰参した。

「第三段 源氏、紫の君を盗み取る」

源氏の君は左大臣殿においでになつたが、いつものように、女君がすぐにはお会いなさらない。何となくおもしろくなくお思いになつて、和琴を即興に掻き鳴らして、常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、声はとても優艶に、口ずさんでおいでになる。

参上したので、呼び寄せて様子をお尋ねになる。「これこれしかじかで」と申し上げるので、残念にお思いになつて、あの宮邸に移つてしまつたら、わざわざ迎え取ること好色めいたことであろう。子供を盗み出したと、非難されるだろう。その前に、少しの間、女房の口を封じさせて、連れて来よう」とお考えになつて、

「早朝にあちらに行つて。車の準備はそのままに。隨身を一、二名を申し付けておけ」とおっしゃる。承知して下がつた。

源氏の君は、どつしよ。噂が広がつて好色めいたことになりそうな事。せめて相手の年齢だけでも物の分別ができ、女が情を通じてのことだと想像されるようなのは、世間一般にもある事だ。父宮がお探し出されるだろう時も、具合が悪く、言い訳できない事だ」と、お悩みになるが、この機会を逃したら大変後悔することになるので、まだ夜の深いうちにお出になる。

女君は、いつものように気が進まない様子で、かしくまつた感じでいらつしやる。あちらに、どつしても処理しなければならぬ事がございますのをお思い出しまして、すぐに戻つて来ます」と言つて、お出になるので、お側の女房たちも知らないものであつた。ご自分のお部屋の方で、お直衣などはお召しになる。惟光だけを馬に乗せてお出になつた。

門を打ち敲かせなされると、何も事情を知らない者が開けたので、お車を静かに引き入れさせて、惟光大夫が、妻戸を打ち鳴らして、咳払いすると、少納言の乳母が察して、出て来た。

「こちらにいらつしやいます」と言つて、

「若君は、お寝みになつておりました。どつして、こんな暗いうちにお出あそばしたのでしよう」と、どこかのお帰りがけと思つて言つた。

「宮邸へお移りになるそうですが、その前にお話し申し上げておきたい」とおっしゃる。

「どのようになつてお召しませましょつか。どんなにしつかりしたお返事ができましょつか」

と言つて、微笑んでいた。源氏の君が、お入りになると、とても困つて、気を許して、見苦しい年寄たちが寝ておりますので」とお制し申し上げる。

「まだ、お目覚めではありませんね。どれ、お目をお覚まし申しましょつか。このような素晴らしい朝霧を知らないで、寝ていてよいものですか」

とおっしゃつて、ご寢所にお入りになるので、もし、とも、お止めできない。

紫の君は何も知らないで寝ていらつしやつたが、抱いてお起こしなさるので、目を覚まして、父宮がお迎えにいらつしやつたと、寢惚けてお思いになつた。

お髪を掻き繕いなどなさつて、

「さあ、いらつしやい。宮さまのお使いとして参つたのですよ」

とおっしゃる声に、違つた人であつた、とびつくりして、恐いと思つていたので、

「ああ、情けない。わたしも同じ人ですよ」

と言つて、抱いてお出なさるので、惟光大夫や、少納言の乳母などは、これは、どうなさいますか」と申し上げる。

「ここには、常に参れないのが気がかりなので、気楽な所にと申し上げたが、残念なことに、お移りになつたならば、ますますお話し申し上げにくくなるだろうから。誰か一人付いて参られよ」

とおっしゃるので、気がせかれて、

「今日は、まことに都合が悪うございませう。宮さまがお越しあそばした時には、どのようにお答え申し上げましょつか。自然と、年月をへて、そんなられるご縁でいらつしやれば、ともかくなられましょつか、何とも考える暇もない急な事でございますので、お仕えする者どももきつと困りましょつか」と申し上げると、

「よし、後からでも女房たちは参ればよからう」と言つて、お車を寄せさせなされるので、驚きめきれて、どつしたらよいものかと困り合つていた。

若君も、変な事だとお思いになつてお泣きになる。少納言の乳母は、お止め申し上げるすべもないので、昨夜縫つたご衣装類をひっさげて、自分も適当な着物に着替えて、車に乗つた。

二条院は近いので、まだ明るくならないうちにお着きになつて、西の対にお車を寄せてお下りになる。若君を、とても軽々と抱いてお下るしになる。少納言の乳母が、

「やはり、まるで夢のような心地がしますが、どういたしましたらよいことなのでしょうか」と、ためらつていたので、

「それは考え次第というものだ。ご本人はお移し申し上げてしまったのだから、帰らうと思つたら、送つてやろう」

とおつしゃるので、笑つて下りた。急な事で、驚きあきれて、心臓がどきどきする。

「宮さまがお叱りになられることや、どうおなりになるお身の上だろうか、ともかくにも、身内の方々に先立たれたことが本当にお気の毒」と思つと、涙が止まらないのを、何と言つても不吉なので、じつと堪えていた。

こちらはご使用にならない対の屋なので、御帳台などもないのであつた。惟光を呼んで、御帳や、御屏風など、ここかしこに整えさせなされる。御几帳の帷子を引き下ろし、ご座所など、ちよつと整えるだけで使えるので、東の対にお寝具などを取り寄せに人をやつて、お寝みになつた。

若君は、とても気味悪くて、どうなさる気だろうと、ぶるぶると震えずにはいらつしゃれないが、やはり声を出してお泣きになれない。

「少納言の乳母の所で寝たい」

とおつしゃる声は、まことに幼稚である。

「今からは、もうそのようにお寝みになるものではありませんよ」

とお教え申し上げなされると、とても悲しくて泣きながらお寝みになつた。少納言の乳母は横になる気もせず、何も考えられず起きていた。

夜が明けて行くにつれて、見渡すと、御殿の造りざまや、調度類の様子は、改めて言うまでもなく、庭の白砂も宝石を重ね敷いたように見えて、光り輝くような感じなので、きまり悪い感じに思つて座つていたが、こちらには女房なども控えていないのであつた。たまのお客などが参つた折に使う建物だったので、男たちが御簾の外に控えているのであつた。

このように、女をお迎えになつたと、聞いた人は、誰であろうか、並大抵の人ではあるまい」と、ひそひそ噂する。御手水や、お粥などを、こちらの対に持つて上がる。日が高くなつてお起きになつて、

「女房がいなくて、不便であるうから、しかるべき人々を、夕方になつてから、お迎えなされるとよいだろう」

とおつしゃつて、東の対に童女を呼びに人をやる。小さい子たちだけ、特別に参れ」と言つたので、とてもかわいらしい姿して、四人が参つた。

紫の君はお召物にくるまつて臥せつていらつしゃるのを、無理に起こして、

「こんなふうにお嫌がりなさいますな。いい加減な男は、このように親切にしましうか。女性というものは、気持ちの素直なのが良いのです」

などと、今からお教え申し上げなされる。

ご容貌は、遠くから見ていた時よりも、美しいので、優しくお話をなさりながら、興趣ある絵や、遊び道具類を取りにやつて、お見せ申し上げ、お気に入ることどもをなされる。

次第に起き出して御覧になると、鈍色の色濃い喪服の、ちよつと柔らかくなつたのを着て、無心に微笑んでいらつしゃるのが、とてもかわいらしいので、ご自身もつい微笑んで御覧になる。

東の対にお渡りになつたので、端に出て行つて、庭の木立や、池の方などを、お覗きになると、霜枯れの前裁が、絵に描いたように美しく、見たこともない四位、五位が色とりどりに入り乱れて、ひっきりなしに出入りしている。なるほど、素晴らしい所だわ」と、お思いになる。御屏風などの、とても素晴らしい絵を見ては、機嫌を良くしていらつしゃるのも、あどけないことよ。

源氏の君は、二、三日、宮中へも参内なさらず、この人を手懐けようとお相手申し上げなされる。そのまま手本にどのお考えか、手習いや、お絵描きなど、いろいろと書いては描いては、御覧に入れなされる。とても素晴らしくお書き集めになつた。武蔵野と言つと文句を言いたくなつてしまつと、紫の紙にお書きになつた墨の具合が、とても格別なのを取つて御覧になつていらつしゃつた。少し小さくて、

「まだ一緒に寝てはみませんが愛しく思われます 武蔵野の露に難儀する紫

のゆかりの草を」

とある。

「さあ、あなたもお書きなさい」と言つと、

「まだ、うまく書けません」

と言つて、顔を見上げていらつしやるのが、無邪気かわいらしいので、つい微笑まれて、

「うまくなくても、まったく書かないのは良くありません。お教え申し上げましょう」

とおつしやると、ちよつと横を向いてお書きになる手つきや、筆をお持ちになる様子があどけないのも、かわいらしくてたまらないので、我ながら不思議だと思ひになる。書き損つてしまつた」と、恥ずかしがつてお隠しになるのを、無理に御覧になると、

「恨み言を言われる理由が分かりません わたしはどのような方のゆかりなんでしょう」

と、とても幼稚だが、将来の成長が思ひやられて、ふつくらとお書きになつてゐる。亡くなつた尼君の筆跡に似てゐるのであつた。当世風の手本を習つたならば、とても良くお書きになるだろう」と御覧になる。

お人形なども、特別に御殿をいくつも造り並べて、一緒に遊んでは、この上ない憂さ晴らしの相手である。

あの残つた女房たちは、兵部卿宮がお越しになつて、お尋ね申し上げなさつたが、お答え申し上げるすべもなく、困り合つてゐるのであつた。暫くの間、他人に聞かせてはならぬ」と源氏の君もおつしやるし、少納言の乳母も考へてゐることなので、固く口止めさせていた。ただ、行く方も知れず、少納言の乳母が連れてお隠し申し上げまして「とばかりお答え申し上げますので、宮もしようがないとお思ひになつて、亡くなつた尼君も、あちらにお移りになることを、とても嫌だと思ひであつたことなので、乳母が、ひどく出過ぎた考えから、素直にお移りになることを、不都合だ、などと言わないで、自分の一存で、連れ出してどこかへやつてしまつたのだらう」と、泣く泣くお歸りになつた。もし、消息をお聞きつけ申したら、知らせなさい」とおつしやる言葉も、厄介で。僧都のお所にも、お尋ね申し上げなさるが、はつきり分からず、惜しいほどであつた。器量など、恋し

く悲しいと思ひになる。

北の方も、その母親を憎いと思ひ申し上げなさつてゐた感情も消えて、自分の思いどおりにできようと思ひになつてゐた。当てが外れたのは、残念にお思ひになるのであつた。

次第に女房たちが集まつて来た。お遊び相手の童女や、幼子たちも、とても珍しく当世風な様子なので、何の屈託もなく遊び合つてゐた。

紫の君は、男君がおいでにならなかつたりして、寂しい夕暮時などだけは、尼君をお思ひ出し申し上げなさつて、つい涙ぐみなどなさるが、父宮は特にお思ひ出し申し上げなさらない。最初から一緒に遊ばないで、過ごして来られたので、今ではすっかりこの後の親を、たいそう馴れお親しみ申し上げていらつしやる。外出からお歸りになると、まっさきにお出迎えして、親しくお話をなさつて、お胸の中に入つて、少しも嫌がつたり恥ずかしいとは思つてゐない。そうしたことは、ひどくかわいらしい態度でなつた。小賢しい智恵がつき、何かとつとつとつしい関係となつてしまつと、自分の氣持ちと多少びつたりしない点も出て来たのかしらと、心を置かれて、相手も嫉妬しがちになり、意外なめめ事が自然と出て来るものなのに、まことにかわいらしい遊び相手である。女の子というものは、これほどの年になつたら、氣安く振る舞つたり、一緒に寝起きなどは、とてもできないものなのに、この人は、とても風変わりな大事な子だと、お思ひのようである。

